
連鎖する運命

ESP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連鎖する運命

【Nコード】

N7443A

【作者名】

ESP

【あらすじ】

運命は、連鎖する。ある一人の殺人鬼の旅立ちを始まりに、様々な偶然と必然が連鎖する、運命という名の螺旋。

プロローグ

気がつくと、そこはいつもの丘の上だった。

空は太陽の放つ鮮やかな朱色に染まっていた。

そこでいつもの風景を見る。小高い丘からでも分かるこじんまりとした村が、夕焼けの光を浴びている。

捨てていたはずの感情が脈うつ。

この景色は、昔から、まだ家族がありヒトの心をもっていた日々より知っているのに。

ややあって、俺は丘をゆっくりと下りる。山の中に吸い込まれていく、太陽の閃光を身に浴びながら……。

俺の名前は、レオン。血塗られた道でしか存在理由を見出だせない、蠢く骸だ。

夕焼け

村の構造は至ってシンプルだ。中央に広場があり、それを囲う様に民家や田園が広がっている。家は木造で、やや床が高く設計されている。これは近隣の川の氾濫した時の、俺が生まれる前に起こった事なのだが、その対策の為だった。

俺は寄り道せず真っ直ぐに家を目指す。元より別に寄るところも無いのだが。

村人は俺を見るなり、集団となり話始める。

こういう対応にも馴れた。死んだ両親から聞いたところ俺が生まれる前から既にこういう迫害を受けていたという。何故か。理由は分からなかった。俺の家族は、村の誰とも会話することを許されず、作物を育てる為の敷地も特に狭く、奴隷の様な生活を強いられた。

子供の頃は、無意味に暴力を受けた。ひどいときには大人に半殺しにされたこともあったし、また無実の罪で晒者にされることもたびたびあった。

そして、13歳になったある日、両親は気が狂って死んだ。同時に俺の心も壊れたんだと思う。

その日以来、俺の感情は消え失せたのだった。

それから、虐げられるのも苦痛では無くなった。無感の日々。

だが、ねじが外れたのは感情だけではなかったのだ。

あの無感の日々は、ある衝動を見事に隠蔽し、蓄積させるものであった。

「…全部、壊してやろう」

破壊という名の衝動が、こみあげてくる。無感そのままでの、破壊衝動。それはそのまま十年出番を待続けた父の斧を握るよう命じ、つき動かした。

ひんやりとした夜風を受け、俺はあの丘に佇んでいた。

空には雲がたちこめ、月明かりさえ届かない漆黒の闇。不思議な光景だ。

なにも彩るものは無い。だが村は緋色>あかくかった。

俺は今日見た夕焼けを思い出す。

「…ふふっ」

ほくそ笑み、驚く。

「…感情が、戻ったのか」

何故だか愉快でたまらなかった。次々と口から洩れる喜々とした嗚咽を止められない。いや、止めたくない。

そして、気付く。

「…俺は、夕焼けだ」

何人も俺を染める事は出来ない。

「俺は…夕焼けだ」

…そして、夕陽は必ず墜ちる。

「…ならば俺は、墜ちる陽となり…」

いいかけ、そのまま俺は、丘を下りて行った。もうここには未練が無かった。あとは朽ちていく闇があるだけ。

それは俺も、同じか。十年忘れていた笑みを、取り戻すかの様に俺は笑った。

「……朽ちるまで、照らし続けよう」

それは正しく、狂喜であった。

それからの俺は、いくつかの町を転々としていた。あてもなく、朽ちていく町を背に…。

もう何個目かわからなくなったある町で、ある噂を耳にする。

>夕焼けの狂喜くなる殺人鬼の噂だ。

緋く光る斧を手し、そいつはふらりと町に現れる。

狂った笑い声をあげながら、町を夕焼けに染めるといふのだ。

俺は一人くすりと笑う。人の心までも染まるといふのに気がついたのだ。

それがおかしくて、また笑い、ゆっくりと緋い斧を握り直す。

またひとつ、町が夕陽に染まる。

ロウニギウス

今世界は、平和という偽りを享受していた。

世界各地では局所的に紛争や暴動、テロ活動が起こってはいるが、大多数の地区は平和で、流通もあり貨幣も回った。

なにより大国同士の和平条約も締結されている今、住人達は裕福で忙しい毎日を楽しんでいた。

だが、終わりの時は確実に、ゆっくりではあるが進行していることに、気付いている者はいなく、束の間の安息を持て余す日々が続いていた。

そんな時世に、意気揚々と古びたギターを担ぐ若者が、大国ロウニギウスの街道を闊歩していた。

若者はロウニギウスのシンボルである白い塔をその目にみとめ、一人であるが鷹揚に笑ってみせる。

すれ違う人々に若干冷たい視線を浴びせられるが、そんな事は構わないらしい。

若者は、どうやら旅芸人の様だった。

頭に薄汚れた茶色のバンダナを巻き、羽織りマントの下には村人がよく着る皮の服。

腰には何故か海賊が使用する腰帯が巻かれていた。

そして、裸で担がれた古いギター。

貧相な出で立ちだが、若者にはよく似合っていた。

若干の軽蔑の空気も気にせず、その辺鄙な若者は、ロウニギウスの門を指していった。

ところ変わり、ロウニギウス軍務卿室

いくつもの本棚が部屋の両脇をしめ、その中央に置かれた黒光りする机の前に軍務卿であるネルソン卿は立っていた。

様々な紋章が施されたローブを着る初老の出で立ちで、ネルソンは苛立ちをふくんだ表情で目の前の男を睨む。

「報告はそれだけか」

ネルソンに睨まれた、鎧を纏った男は低く頭をうなだれた。

「はっ。なお現在も捜索中ではありますが、いかんせん……」

ネルソンは、頑丈な机が壊れんばかりに勢いよく叩くと、興奮のあまり振動する手を固く握りしめた。

「なんとしてでも探し出せ。私が直接行きたいところだが、悪い噂も耳にするのでな」

「…エルルで御座いますか」

「そうだ。あまり娘の為に大事な手駒を動かすことも出来ん」

ネルソンは背後を振り向き、ロウニギウスが一望できる窓際へ寄った。

鎧の男は姿勢を変えない。

「…いいか。いかな手段も問わん。一刻も早く見つけ出せ…もう猶予もない」

鎧の男はその言葉で一度大きく返事し、ネルソンが命じるでもなく退室していった。

「…あの馬鹿娘が。この忙しい時に」

ネルソンは大仰に椅子に座りこむと、大陸の主要な国家が写し出されている地図を見る。

「…なにが条約だ…エルルめ」

ネルソンはそれだけ呟き、あとは無言でエルルと書かれた地区を見るばかりだった。

鎧の男は、ロウニギウス城を背に歩いていた。

「あの軍務卿も、娘の事なんか放つとけばいいのにな」

日を浴びて光る金髪をかきむしり、愚痴を零す。なかなかの男前である。

「ま、命令だからな。しょうがないか」

「あ、隊長。ウイング隊長」

そのとき城門で待っていたとされる、部下らしき大柄の男が駆け寄って来た。

「どうでした？原隊復帰するか？」

部下の望むこととは反対な結果を背負ったウイングは、苦笑まじりに言った。

「残念。引き続きだとさ」

大柄な男は、見るからに脱力した様子でしゃがみ込む。

「またですかい。…なんで俺らが家出娘の搜索なんて……とびっきりの美女なら話がわかりますがね」

ウイングは、今年15歳になったばかりのネルソンの娘を思い出す。

「…確かにね。君にはちょっと小便臭すぎるかな」

「勘弁して下さいって」

年上の部下に懇願され、ウイングはまたも微苦笑を浮かべる。

「…冗談は無しで、気合いいれて探すよ。ノード、アジトで作戦会議だ」

「あいさ」

そういうと二人の兵士は、活気溢れるロウニギウスの市街へと連れ立って歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7443a/>

連鎖する運命

2010年12月22日14時35分発行